

波多野・前田両流平曲の消長

奥村, 三雄

<https://doi.org/10.15017/2332634>

出版情報 : 文学研究. 83, pp. 1-22, 1986-02-28. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :



波多野・前田両流平曲の消長

奥村三雄

一 波多野・前田両流平曲家の系譜を中心に

〔1〕 平家物語を琵琶の間奏にあわせて語る、いわゆる平曲は、中世期において、一方流―師堂派・妙観派・源照派・戸島方―、八坂流―妙聞派・大山方―の二流六派に分かれたが、それらの中、近世期平曲の中心勢力とも言うべき師堂派は、更に山中久一・波多野孝一（慶安四年没）を祖とする波多野流と、高山誕生・前田九一（貞享二年没）ら一派の前田流とに分派した。

所でこの場合、「波多野流は最初からふるわなかった」とする説（岩波大系本『平家物語（上）』56頁・『平家物語講座（二）』¹²⁵頁等）が有力であるが、私は従わない。

〔2〕 例えば波多野流平曲家の系譜に関し、『平家音楽史』251頁や252頁に示される如き類（下記〔7〕項の(B)(C)）を信ずるならば、それは誠に寂しい限りであり、不振の言葉がふさわしいわけだが、これは『平家音楽史』の著書の調査不足というべきだろう。

慶長八年～安永六年の間の権成者（検校昇格者）系譜を記した『三代関』（東北大学狩野文庫に文久二年の転写本がある）を見ても、下記〔7〕項(A)の如く、波多野孝一の流れを汲む権成者は三十名を越えるのである。

〔2・1〕 下記〔7〕項の(B)(C)は、それぞれ『平家詞曲記』・『平家正節』及び藤村性禪氏の所説として、『平家音楽史』

に掲げられる波多野流平曲家の系譜を整理したものであるが、実際問題としては、次の如くいろいろと疑問が多い。

先ず(B)の河瀬意一は、『三代関』では、「享保十七年、野川らく一・高浜いさ一をそれぞれ祖・坊として檢校になった妙観派の人」とされる。それと別に「河瀬意一は宝暦の頃荻野知一に波多野流の秘事物を伝授した」というような記録（丹羽敬仲の平家正節序文）も存する故、彼は妙観派から師堂派の波多野流に転じたのかとも思われる。しかし彼を《波多野孝一の直弟子として、その跡を次いだ檢校》と見る事は到底できない。第一、慶安四年没の波多野と、享保十七年権成の河瀬とでは、年代的にも開きがありすぎる。尤も『平家音楽史』251・258頁の記述「平家詞曲日記寛永二年桜町上皇聴河瀬意一中野順一所唱」云々によれば、右記年代面の問題は解決するわけだが、これは『平家音楽史』の誤記とすべきもの。『平家詞曲記』（亀田安道著）原本では「寛永」でなく「寛延」となっており、それが「桜町上皇」の年代にも符合するのである。

同様にして、〔7〕項(C)の岸部檢校を波多野孝一の直弟子と見る事も、年代的に不合理である。安永二年松岡仲良写しの波多野流大秘事本（奥村俊郎氏蔵）の奥書には、「この本は岸部檢校の依頼で大秘事の詞章を整えたものだ」というような記述があるし、また「岸部檢校の直弟子藤丸氏が、寛政十一年に波多野流小秘事を書写した」というような徴証（京都府立資料館本小秘事の奥書）もある。当然、波多野孝一檢校と岸部檢校との間に何人かの檢校名を補わねばなるまい。

その他にも下記〔7〕項(B)(C)に関する疑問は多い。尤も明治四十三年の著書を現代的な眼で批判するのは、或意味で酷にすぎるわけだが、しかし翻って考えるに、またこれら『平家音楽史』の説は、『平家物語講座(二)』（昭和三十三年）129頁等でもそのままとり上げられ、「波多野流系譜」とされているような事情もある故、敢えて一言した次第である。〔2・2〕 一方、下記〔7〕項(A)についても問題がないわけではない。例えば『三代関』や『表控』によると、京

都前田流の平曲を学んだはずの亀田意一や荻野知一が、《それぞれ綾谷ほの一・谷崎叶一（共に広島支配校）を祖師・坊主として権成した》事になっているが、〔7〕項の(A)にもそれに似た名儀上のみの師弟関係がないとは言えない。しかし〔7〕項(A)は、何と言っても公的な記録に基づくものであり、〔7〕項(B)(C)など従来の説に比べれば、遙かに信頼度が高いはずである。

〔3〕 かくして下記〔7〕項(A)の波多野流系譜を信ずるに足るとするならば、当然、我々はそこから、波多野流の史的展開に関し種々の考察を試みる事ができるわけだが、その詳述は別稿をまつ事とし、ここではとりあえず「波多野流は最初から全く不振だった」という通説を批判することにした。

〔3・i〕 この場合、下記〔7〕項(A)と前田流平曲家の系譜〔7〕項(D)との比較についても詳述の違はないが、例えば《(i) 一六四三年以前（慶長・寛永期）の権成者として、波多野流には松賀りう一・岡本へん一の二名が認められるが、前田流にはそれがない。(ii) 『三代関』冒頭に掲げられる小田切りよ一（慶長八年権成）が、波多野流一派とも言うべき山中久一門下であるのに対し、高山誕生一・前田九一の一門には慶長期の権成がない》等々、両派分岐当時における波多野流の盛況を思わせる徴証があれこれ認められる。

〔3・ii〕 更に『三代関』所掲権成者を、時期的な面から五・六十年ずつ三期に区切り、前期（一六六〇年頃まで、中期（一七二〇年頃まで）、後期（一七二〇年頃以降）に分けて見ても、その前期の権成者は、波多野流四名・前田流五名という事で、ほぼ拮抗している。

〔4〕 要するに波多野・前田両流分岐の当初においては、当時新しく刊行された流布本平家物語の支持派として、波多野流が中心勢力だったと考えられる。

〔4・i〕 そう言えば『台徳院実紀』（改訂増補国史大系）や『駿府記』（国書刊行会叢書）の記述その他によると、前田流の祖とも言うべき高山誕生一は慶長十八年、金山奉行大久保石見守長安の疑獄事件（家康の側近本多正信と大久保長安

の争い)に連座して失脚した模様である。その頃においては、当然、山中久一や波多野孝一の流派が勢力をもったはずなのである。

『当道要集』の編纂された寛永の頃、波多野孝一検校は、既に一方流の大幹部として六老の地位にあったが、前田九一は未だ同書にその名前さえあげられないという状態である。前田九一が京都を離れて江戸に下らねばならなかった理由の一端も、その辺に求められようか。

〔4・2〕 流布本の成立には、総検校伊豆円一はじめ奥田・木村・村田等妙観派の幹部連も関与したらしい故、師堂派の波多野・前田両流対立に当り、妙観派は当然、流布本重視の波多野流を支持したはずである。中世後半期平曲の中心勢力であり、近世に入っても師堂派に次ぐ勢をもっていた妙観派が然りとすれば、他の流派も恐らくそれと同步調をとった事であろう。

〔4・3〕 右記に関連して、当時は他流派から師堂派波多野流への転向者もかなりあった模様である。例えば『平家音楽史』²⁴⁷頁所引の『平曲統伝記』には、「山中某・岡本某・波多野孝一あり、八坂流の余瀝を汲みたる長原某に学び」云々の記述があるが、これも「たまたま八坂流から一方流師堂派——特に山中久一・波多野孝一の一派——に転向してきた長原某がいたので、好便に八坂流平曲を学んだと見るべきだろう。波多野孝一と並記される事からしても、山中某・岡本某はそれぞれ波多野の師山中久一及び波多野の門弟岡本へん一を指すと見なされるが、このような錚々たる師堂派幹部が、揃って八坂流に入門するというような事は、とても考えられないのである。当時における八坂流平曲は衰退とみに著しく、一方流への転向者も続出したらしい事など、『平曲譜本の研究』²²頁の他に述べた如くである。

〔4・3・1〕 また一方、公的には妙観派検校として「享保十七年、野川らく一・高浜いさ一をそれぞれ祖・坊として権成した」(三代関)とされる河瀬意一も、実際面では左記(i)(iii)の如く、師堂派波多野流検校として活躍し

たらしい徴証がいろいろ認められる。やはり妙観派から波多野流に転向した例と言えよう。

(i)「荻野知一検校は波多野流の河瀬検校について学び、宝暦九・十年にそれぞれ小秘事・大秘事を習得した」という丹羽敬仲の『平家正節』序文の記事。(ii)「河瀬検校の時代に堀景山・今枝栄済等の校考した写本があった」という『追増平語偶談』の記事。(iii)「寛保二年、桜町上皇が河瀬意一・中野順一の平曲を聴かれた」という『平家詞曲記』の記事等々。

右記(i)(ii)はそれぞれ「河瀬検校」とのみあるが、諸般の事情からして、一応、河瀬意一をさすと思われる。時代的にも矛盾がないし、第一、彼以外に河瀬検校と称すべき人は全く見当たらないのである。また(ii)(iii)は、波多野流検校と明記されるわけではないが、それぞれに並記された人名はすべて波多野流関係の人であるし、(ii)の『追増平語偶談』も波多野流平曲関係の書物である。

〔4・311〕更に波多野流譜本には、妙観派の本文詞章に師堂派波多野流の節ハカセを付したらしいもの(静嘉堂文庫蔵本)があるが、これもやはり、波多野流の人が妙観派の本を用いて節ハカセを付したというよりも、妙観派の人達が師堂派波多野流を志向した為の現象と見るべきだろう。

そう言えばこの静嘉堂本は、その本文詞章において、既に或程度師堂派への接近が認められ、波多野流の節ハカセが付されるべき下地をなしているとも考えられる。即ちその本文は、(i)大秘事の「宗論」「剣」を欠き、「鏡」をたてる事、(ii)巻六の末に「邦綱卿沙汰」の句をたてる事等々、いわゆる妙観派諸本(京師本・神宮文庫本その他)に似た面が多いが、また一方、(iii)「妓王」の句が「我身栄花」の後でなく、「清水炎上」の後におかれる事など、むしろ師堂派の本に近い面も存する。

〔4・32〕師堂派と他流派との交流と言えば、「妙観・源照・戸島各派の人々は事実上、前田流に属したと思われる」とする説(岩波大系本『平家物語(上)』解説その他渥美かをる氏)もあるが、両流分派の初期頃は、むしろ波多野流へ

の転向者が多かったと考えるわけである。

また師堂派波多野流と妙観派との関係につき、渥美氏には「当時（荻野知一が上落した宝暦三年頃）の波多野流はすっかり衰えていた為、妙観派（またはその他の流派）の檢校によって伝統が保たれた」というような推論（大学堂書店刊『平家正節の研究』²⁰⁶頁その他）がある。本稿における私の主張はあくまで「初期波多野流の盛況」であり、敢えて十八世紀後半頃の事にまで言挙げするつもりはないが、それでもやはり、右記渥美氏説には疑問を懐く。

当時の妙観派が、京都平曲としての波多野流を代って支える位に、優勢であったのならば、幕末期頃、妙観派平曲が殆んどその根跡を残さないのは不自然である。近世期平曲の中心勢力はやはり師堂派だったと見るべきだろう。また近世後半期における波多野流の勢いは確かに前田流に及ばなかったようであるが、それでもかなり最近までその流れを伝えていた。明治期に入ってから、なお京都には奥村允懷一（明治十七年没）や、その弟子藤村性禪の如き波多野流檢校がおり、その藤村の門弟としても、湯浅半月・岩田喜八・冷泉為継・大橋四五六・村上竹次郎・川合長蔵・瀬川正夫・宇野某などあまたがあげられるのである。それらの中、湯浅半月の平曲は、コロムビアレコードの『邦楽傑作集』49集（昭和九年）に、その一部が採録されているし、また藤村平曲については、『日本の音楽』（大正二年）所掲兼常清佐氏論文にその採譜の一部が付されている。

〔5〕以上、初期波多野流の盛況について述べたわけだが、更には前記（〔3・1〕項）『三代関』所掲権成者を三区分したその後期（一七二〇年頃以降）を見ても、波多野孝二一派の十八名は前田九一派の十六名を凌ぐ。尤もこのような現象については、前記（〔2・2〕項）『名儀上の師弟関係』という問題を考慮する必要があるし、また例えば会京都前田流の荻野知一が河瀬檢校から波多野流秘事物を伝授され、更にそれを波多野流の石塚檢校に伝えた（丹羽敬仲の平家正節序文による）事など、《波多野・前田両流の相互交渉―更には師堂派と他流派との相互交渉―という問題（昭和六十一年四月勉誠社から刊行予定の小著『波多野流平曲譜本の研究』第四章に詳しい）も残される。右記「十八名・十六

名」というような権成者数が、直ちに十八世紀～十九世紀前半頃における波多野・前田両流の勢力関係を示すわけではないが、それはそれとして注目に値する。

〔5・1〕 そういう意味で、前田一派の権成者数が波多野一派のそれを凌駕するのは、結局、前記〔3・11〕項の中期、つまり一六六〇年頃から一七二〇年頃にかけての約六十年間である。そこでは前田一派の権成者が三十九名に達し、確かに波多野一派の権成者十名に比し、圧倒的な優勢と言える。

〔5・11〕 而してこの頃における前田流の優勢は、従来からも言われる如く、《前田九一（貞享二年没）が、波多野孝一（慶安四年没）より三十数年も後まで活躍した》事とか、《前田流が京都以外の各地へも展開して行った》事などの事情が、徐々に反映して行った結果と見られる。

〔5・2〕 右記〔5・11〕項の後者について言えば、前述の如く《両流分岐当初、京都では波多野流が優勢だった為、前田九一はやむなく江戸に下った》というような事も考えられそうだが、しかし結果的には、それが前田流に幸いした。江戸に転出したからこそ、幕府の保護を得て、各地各藩に展開する事ができたわけである。

前田九一の直弟子七名の中には、山下五一など京都での門弟も存すること勿論であるが、さし当り万治年間以降に権成した四名（星合・吉沢・川崎・牧野）などは、江戸での弟子だったかと思われる。前田九一江戸下りの時期は必ずしも明らかでないが、例えば万治三年権成の吉沢弘一については、「延宝元年吉沢検校江戸の邸にて同朋田中万阿弥と平家に関する評論をなせし事あり」（名古屋市史）というように記述があり、江戸前田流の人だった事を思わせる。

『也有自筆平語』（角川書店刊）の解題35頁等にも「吉沢弘一検校は前田の江戸における弟子」というような記述がある。とすれば、吉沢とほぼ同期またはそれ以降の権成者も江戸における前田の弟子と考えられるのである。

また右記吉沢弘一は、『名古屋市史』の記述をその他により、尾張藩主光友に抱えられた事が知られるが、江戸を中心とした前田流の検校達にはこの種の例が多かったかと思われる。

〔5・21〕 更にこの種の例は、江戸前田流に限らず、京都前田流の検校達にも少くなかった模様である。例えば、京都前田流の寺尾勾当に師事した荻野知一が、明和八年から尾張に移り住んで藩主宗睦に引見し、そこで多くの門弟を育てつつ、平家正節を編んだ（丹羽敬伸の平家正節序文その他による）らしい事など、衆知の所だろう。

また横井也有写しの譜本『平語』巻頭の注記等によれば、山下五一（京都における前田の高弟）の孫弟子に当る桐山ゆん一も、権成の後には尾張に移り住み、西沢れ一検校・谷浦勾当など数多の弟子を育てた模様である。尤も右記『平語』の注記は、この譜本を伝えた人の一人として山下検校の門弟「桐山検校」を挙げ、「丹波人也移于洛随師十八才而伝平語一部焉、壮年蒙瑞竜公寵住于尾陽」云々としているわけだが、私はこの桐山検校を『三代関』で貞享四年権成とされる桐山ゆん一と見なしたい。『三代関』に示される系譜「山下五一―松岡勾当―桐山ゆん一」と、『平語』巻頭に注記される系譜「山下検校―桐山検校」とのズレなど、余り目くじらをたてる程の事でもあるまい。

更には荻野の兄弟子亀田意一も、『平曲正節』（京都大学蔵）巻一裏表紙の注記や、『平家詞曲記』（亀田意一の子息安道著）・『太平楽亭平曲集成』（松田謹孝著）の記述等により、もともと、京都前田流の豊田賀一及びその弟子寺尾勾当に師事したと見られるが、明和二年権成の後には江戸に下ったらしく、天明七年彼が江戸惣録になった旨の記述（視聴草）も存する。尚この亀田については、福直叶一が文化五年亀田を坊として権成した旨の記述（座下控）もあるが、福直は後に広島への支配検校となった人である故、亀田は、江戸惣録を辞して後、広島に移り住み、門弟を育てたとも考えられる。『平家正節の研究』所載渥美氏論文なども参照の事。

〔6〕 ともあれ権成者の系譜などに見る限り、前田一派の勢力が波多野一派に比し圧倒的だったのは、概ね寛文・享保初期あたりの五・六十年間であり、両流分岐以後、終始、前田流がリードしていたとは言えないようである。

〔6・1〕 そう言えば、京都前田流に限っての話であるが、『十八世紀半ば頃におけるその衰微状態は極に達しており、荻野知一が前田流の秘事物を学ぶべき師さえなかった』というような指摘（丹羽敬伸の平家正節序文）もある。

前記《京都以外の各地に展開した平曲》も、そのすべてが前田流だったというわけではない。例えば『知新集』（文政五年飯田利矩編）や『広島市史』その他によると、芸州広島 of 歴代支配検校として、「小瀬・吉村（勾当）・平瀬・橋本・中川・綾谷・岩永・綾谷・谷崎・谷永・三宅・手島（勾当）・豊直・福直・手島」などの諸検校があげられるが、前田九一の流れを汲む者は全く認められない。右記の中、特に小瀬・中川・綾谷・谷崎等の場合は、『三代関』で次の如き系譜関係が認められるが、小瀬じゅん一は寛永十五年の権成であり、前田の最高弟山下五一の権成よりも六年早い。従ってその師に当る松下・飯田・石崎等は、年代的に言って前田九一の同輩格または先輩格ということになる。

石崎たん一—飯田ねん一—松下もん一—小瀬じゅん一—中川うん一—東き一—綾合ほの一—谷崎叶一
(1683) (1690) (1736) (1749)

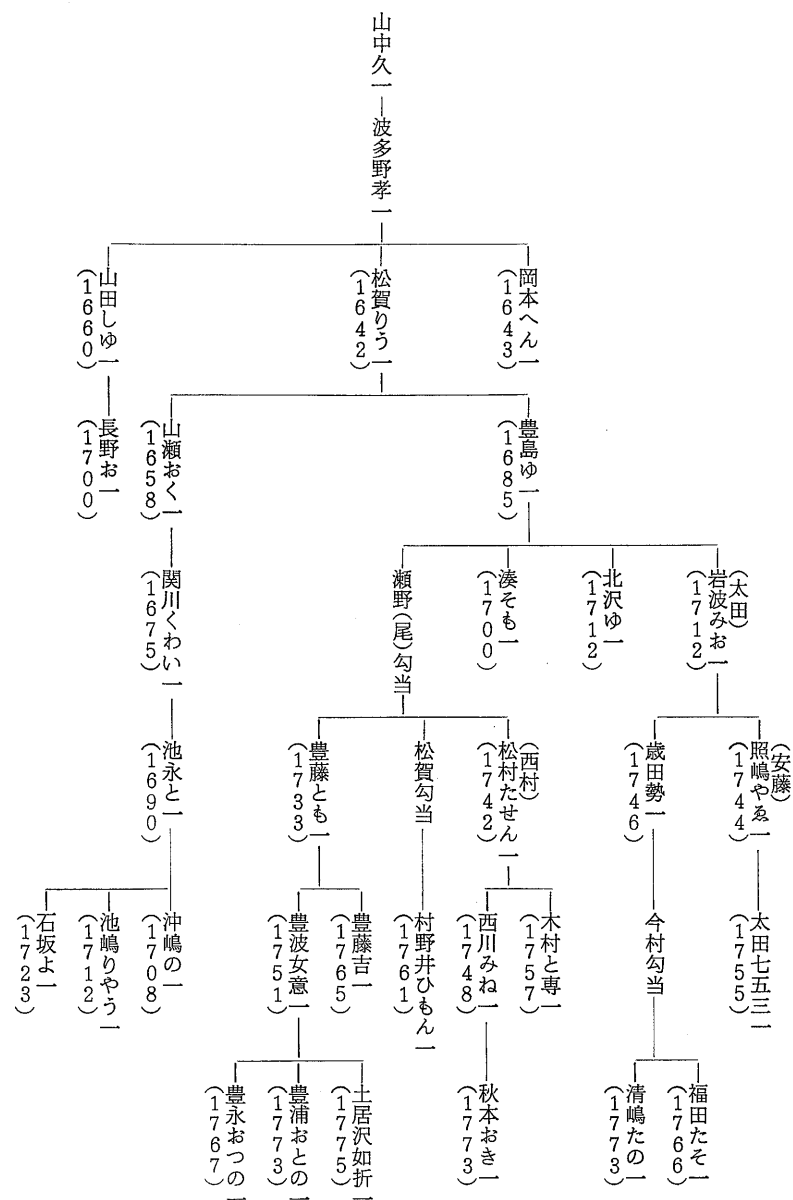
〔7〕 波多野・前田両流平曲家の系譜

左記(A)と(D)は、前述の如き事情を具体的に示す為、波多野・前田両流平曲家の系譜を掲げたものである。

その中、(A)と(C)及び(D)は、それぞれ波多野流及び前田流平曲家の系譜であるが、その(A)・(D)は、それぞれ『三代関』により、山中久一—波多野孝一及び高山誕一—前田九一の系をひく検校達の師弟関係を改編整理したもの。また(B)・(C)は参考までに、『平家音楽史』で「波多野流系譜」として示されるものを整理して掲げたものである。

(A)・(D)の場合、人名の左側に括弧付きで記した数字は、それぞれの権成した（検校になった）年を、西暦で示したものである。

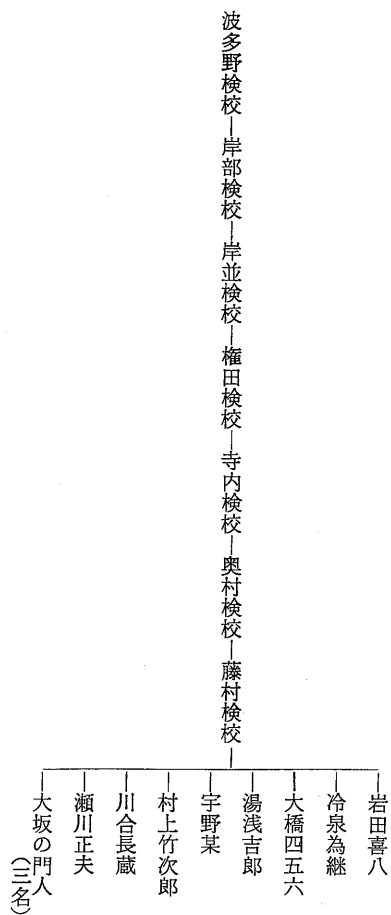
(A) 波多野流平曲家の系譜―『三代関』の記述を中心とする



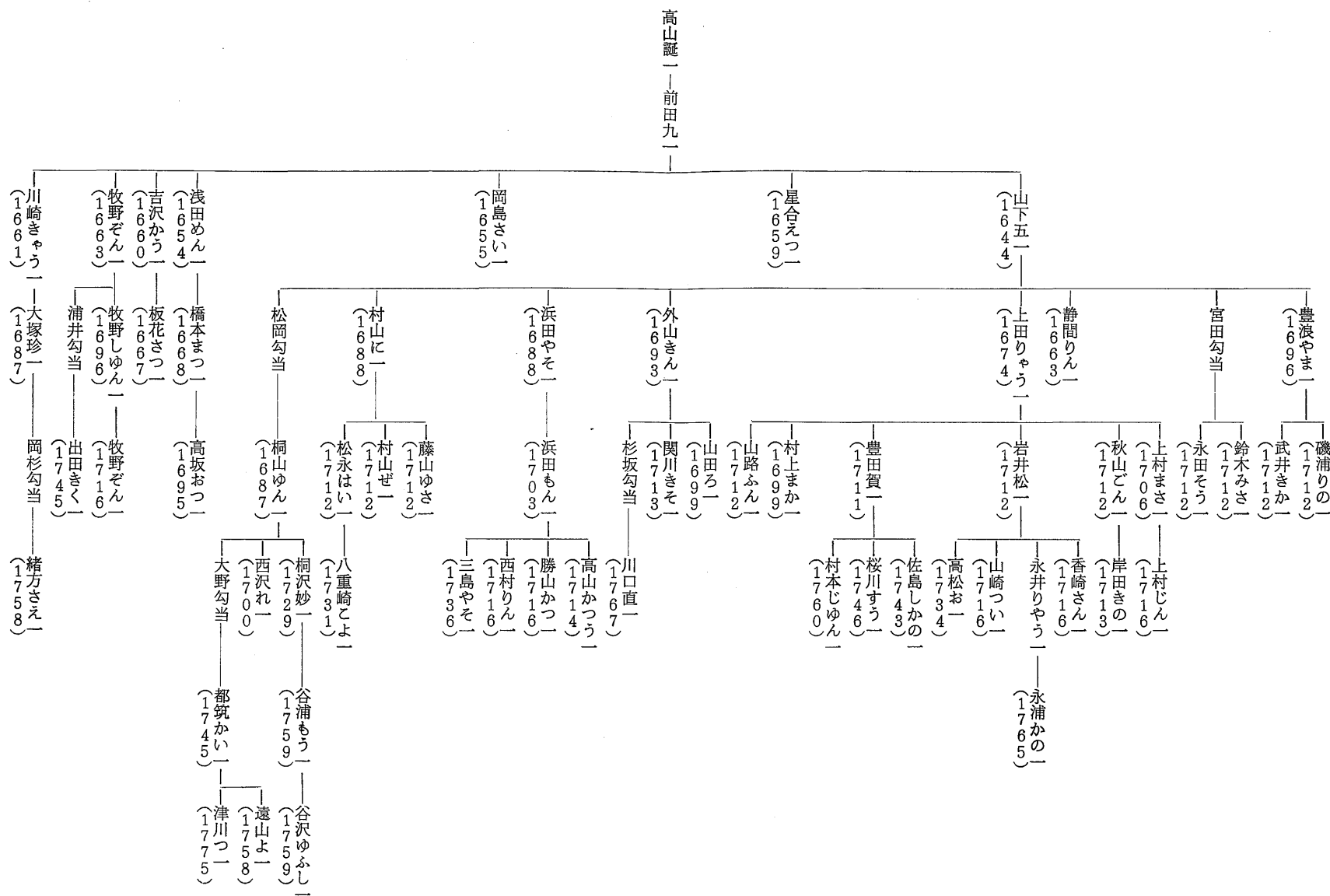
(B) 同―『平家音楽史』(251頁)の説―平家詞曲記・平家正節による

波多野孝一―河瀬意一―荻野知一―石塚某―奥村允懐一

(C) 同―藤村性禪氏の説(『平家音楽史』252頁)所掲



(D) 前田流平曲家の系譜―『三代関』の記述を中心とする



二 波多野流譜本の多様性に関して

〔1〕 以上「波多野流は最初から全くふるわなかった」という通説を批判してきたわけだが、これは当然、波多野流譜本の多様性という事から初期波多野流の盛況を想定した旧稿（『平曲譜本の研究』30頁くや『文学研究』79集等）の考え方に連る。そこでは「波多野流譜本はいずれも同文同譜」とする通説（創元社『平家物語講座（二）』124頁渥美かをる氏・勉誠社刊『波多野流節付語り本（六）』821頁同氏・大学堂書店刊『平家正節の研究』45・76頁山下宏明氏等々）を批判して、波多野流（特に初期の）譜本の多様性を論じたが、そのような譜本の改訂という事は、当然、その流派の盛況（晴眼者への普及等も含めて）を物語ると考えられるのである。沈滞しきった流派では、詞章や曲節を次々改訂して行くような積極性がないはずなのである。

〔2〕 所で右記拙稿の場合、波多野流譜本の多様性に関して先ずとり上げたのは、未紹介の譜本『秦音曲鈔』（享保十四年粟屋右近写、山口県立図書館蔵）であるが、そこで見逃せないのは、この秦音曲鈔が、同じ山口県立の文書館蔵『平家語本』に酷似しているという事だろう。即ち秦音曲鈔が全くの孤立的存在であるならば、波多野流譜本として本文詞章や譜記にいろんな特異性を示す秦音曲鈔も、《ごく影の薄い一時的存在であり、実用面での使用は稀だったのでないか》というような事にもなりかねないわけだが、右記平家語本との相似性という事実が、そのような杞憂を一掃し得るはずなのである。

前記拙稿でも述べた如く、《平家語本は或種の稽古本と見なされる事、平家語本は秦音曲鈔とごく親しい関係の譜本（恐らくは秦音曲鈔の底本）からの抜萃本であるらしい故、それらと同種の先行譜本が他にもあったと見られる事》などからして、初期波多野流では、この種の譜本がかなり使用されていたと考えられるのである。

段通大相傳と云ふもの、龍神の傳
 授ひを伝へ、やゝ其の難事大に
 傳へ、所め、今二面、此段通大に
 我、神の所寶とす。村上の家代應
 龍の、此三、五、六、七、八、九、十、
 龍、やゝ、其、早、も、帝、は、源、氏、と、云、衆

八、七、逆、れ、り、指、暗、も、氣、れ、ぬ、成、爲、
 本、も、氣、し、傳、も、氣、高、も、氣、大、の、氣、
 同、心、も、氣、口、帝、も、氣、大、の、氣、
 龍、ひ、て、抑、ひ、は、成、爲、何、ひ、も、氣、
 伝、れ、は、言、と、曰、是、は、昔、身、敵、三、曲、
 成、爲、へ、ひ、ひ、大、唐、は、後、世、の、傳、士、康

妻、更、と、り、者、も、て、候、三、曲、の、内、の、龍、曲、
 八、曲、は、も、龍、を、依、て、傳、傳、と、云、輪、は、
 今、龍、は、も、龍、を、依、て、傳、傳、と、云、
 入、入、は、も、龍、を、依、て、傳、傳、と、云、
 入、入、は、も、龍、を、依、て、傳、傳、と、云、
 入、入、は、も、龍、を、依、て、傳、傳、と、云、

入、入、は、も、龍、を、依、て、傳、傳、と、云、
 入、入、は、も、龍、を、依、て、傳、傳、と、云、
 入、入、は、も、龍、を、依、て、傳、傳、と、云、
 入、入、は、も、龍、を、依、て、傳、傳、と、云、
 入、入、は、も、龍、を、依、て、傳、傳、と、云、

山は巖の隙に木の洞あり。有明の月は
 空より大鏡面を照れり。草木は春の
 白く花は紅く。玄象も相替り。常
 代は春の物なり。

平家語本卷十四 (25~40頁) 「青山」の章段

青山
 山は巖の隙に木の洞あり。有明の月は
 空より大鏡面を照れり。草木は春の
 白く花は紅く。玄象も相替り。常
 代は春の物なり。

山は巖の隙に木の洞あり。有明の月は
 空より大鏡面を照れり。草木は春の
 白く花は紅く。玄象も相替り。常
 代は春の物なり。

山は巖の隙に木の洞あり。有明の月は
 空より大鏡面を照れり。草木は春の
 白く花は紅く。玄象も相替り。常
 代は春の物なり。

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。

一、ア、一、ハ、ニ、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、